

グループトーク「大間視察の様子を聞いて、何を感じたか」

B班：7人（視察メンバーである清宮氏を含む）

清宮：では、最初にやられますか？ どうぞ。

—— プラントを建設する前に避難計画やインフラ整備を優先させるべきである、というのが3.11以降の常識だと思います。

それから、発電するというメリットの対極に、高レベル廃棄物がどんどん発生するという問題があることも、十分に住民とのコミュニケーションの中で認識する必要があると。東海村もこれで困っているわけですね。

それから、一時的なお金につられて、10年先、50年先を考えられなくなる。当面はとにかく金が落ちてくるということにつられてしまうというのは問題だと思います。以上です。

清宮：ありがとうございます。では、続けて行ってしまいいましようか。

—— 私は、(フォトボイスで) その地域の様子が分かりました。話で聞いただけではなかなか分かってこないことも、写真があったり言葉があったりすることで、現地には行っていないけれども、分かるものがあつた、ということです。

ただ、これからどのような方向に進んでいくのか、原発にしても、何にしても、はなかなか見えてこないなど。いろいろな意見があるので難しいとは思いますが、大間という場所にもよるのだろうけれども、どちらの方向に向かって、どういうふうにしていくのか、というのがなかなか見えづらい。

それから、原発以外の産業、漁業もそうですけれども、それらをどのように進めていくのか。原発だけでは発展していかないの、そこをもう少し絞り込んで進んでいけたらいいのかなど。原発があるということで非難もたくさん受けるので、自分たちはそれ以外にもちゃんとやっているよということを発信していかないといけない。我々は、すごく単純に、大間＝マグロとイメージするけれども、昆布とかイカもあるという話でした。でも、私たちはそういう話は聞かないので、そういうものをちゃんと前に出さないといけない。原発以外でも自分たちは自分たちでちゃんとやることをやっているよ、というのをやらないと。これから先を考えると、はっきり言って、事故はないとは言えないので。原発だけで考えてしまうというのは、というのはありました。

—— 函館の話がいくつかあつたのですが、これは結構大変だなと思っていて。東海村の場合、他の自治体は陸続きなので、経済的なつながりが結構強かったりするかもしれませんが、函館は海も隔てているので、大間に原子力発電所ができた場合、函館は、なんかよく分から

ないけどリスクだけが来る、という感じがあつて。そういう場合に、J-POWER 的には説得せざるを得ないと思うのですけれども、何をもって説得していくのか、というのがかなり難しいなど。地続きであれば、経済発展がありますよと言えますし、陸続きであれば電車で行なったりすると思うのですけれども、海を隔てていて、完全に自立している都市に説明をするのはかなり難しいだろうな、という意識がまずありました。

それから、これは写真自体ではなくて、写真についていた付箋を見て思ったことですが、J-POWERの方が訪問活動をされているという話がありました。まあたぶんそれ以外にも理解を得るための活動はいろいろされていると思いますが。そこに、活動の内容ではなくて、活動自体に対する批判意見が結構貼ってありました。そんなことをしても、内部からの話だから、みたいなことが結構書いてありました。会社や自治体は、賛成してほしいというわけではなくて、ただ説明をしているという意識だと聞いたので、そういう活動自体に批判意見が来るというのは、説明の仕方をもう少し考えたりしないと、説明をするたびに反対派が増えていくような気がします。

清宮：ああ、逆に。

—— ええ。説明するとき、同じような話をしているだけだと、(反対派が増えていくかもしれない) 怖いな、というのがあります。

最後です。これまでもお話が出ていますけれども、発電所ができることで財政的に潤うという話がありますけれども、安全面と引き合いに出される話がお金のお話でなければ、もう少し議論はしやすいと思うのです。目の前にお金が入ってくるというのはやはり大きいので、そちらに引き寄せられてしまって、実際に安全性はどうなのかとか、そういう話ができづらいのかな、というイメージを持ちました。以上です。

—— 今の、函館に説明しにくい、という話ともかぶるのですけれども。大間の中については、役場の方や漁協の方から話を聞いていて、こういう原因でこういう現状だよ、というのがよく伝わってきたのですけれども、逆に大間以外の近隣市町村、もちろん少し離れている函館も含めて、の方々はどう考えているのか、というところも原子力を扱うときには考慮していかなければいけないのかなと思います。近隣の方々はどういう考えを持っているのかな、というのが気になったところです。以上です。

—— 地元の人のお思いと、それ以外の人のお付き合いは、想像以上に難しいな、と書きました。地元の方は地元の方で、「町を思っているのですよ」とか、「暮らしがいろいろよくなるようにしよう」とか、「漁業で獲れたり獲れなかったり波があるのをなんとかしよう」とか、いろいろな思いの中で誘致をした。一方で外の人、例えば函館の方は、万一何かがあったとき

には迷惑をこうむると感じている部分がある。その付き合い方は難しいなということを感じて改めました。

それから、地域の方は養殖とか、企業誘致とか、いろいろと取り組んできた。町の存在をよくしようという構想の中で、ある意味で、原子力をつなぎ役にしようというお考えをお持ちだったのかなと。お金が落ちてきて、ある程度の期間は安堵できるので、その間にいろいろ考えて、多様化を進めていこうとお考えになって、まずはとりあえず来てくれそうなところに来てもらって、交付金やいろいろな形で町の基盤を作って、その上で町の構想を作ろう、そういうことが当時あったのかな、と改めて感じました。

ついでに言うと電源開発は地域にしばられない電力会社なので、国の計画に基づいて事業を進めているのですけれども、そういう全体的な視野で物事を見る必要性もある一方で、個々の地域、まさに大間の人たちは誘致したわけですが、函館の人たちは迷惑だと言っているところで、どういうふうに話をしていけばいいかというのは非常に難しいし、引き続き取り組んでいかないといけないことだと思います。

—— 簡単に3点ですね。(原発の誘致が)大間の産業、漁業と牧畜、それに役立つかという、直接的には役立たないだろうと。それよりも、インフラをしっかりとるのに役に立つ。道路とかその他のインフラですね。私は東海村なのですけれども、それだけお金が入ってくるのも分かりますので、きちんとした計画で道路などを整えていったらいいと思います。

それから、原子力発電は大間町に本当に定着するのかといたら、あれだけばつんと1基だけ、というのも難しいような感じがします。

それから、もうひとつは、東海村と違った受け入れ体制であると。東海村の場合は、原研が先にできました。それから原子力施設を少しずつ増やそうということで、イギリス型の原子炉を入れるような、いろいろ経過はありますけれども、そこからスタートしている。それで皆さんがイエス・ノーを出していったわけですが、大間ではずいぶん違った状況があるということですね。

清宮：ありがとうございます。

最後に私ですね。いろいろ考えたのですけれども、問題が複雑でありすぎるので、簡単に。町の人たちは、町をどうしていきたいかということを実際に1人1人が考えて誘致したのかなと思いました。役場のOBの方のお話を聞いても、基本的に相談したのは漁業関係の方だったと。そこで力を持っている方が議員さんだったということで、積極的に誘致活動をしたと。それで施設見学もして、それに引きずられるような形で誘致・着工が決まったのですけれども。そのときに、例えば漁業関係の奥さんや、他のお仕事に就いている方がどう考えていたのかな、というのは、今回の視察で実際に地元の方と話をする機会は残念ながら取れなかったのです。役場関係の方とJ-POWERの方だけだったので。そこは少しもったいなかったなと思うのですけれども。東海村も干し芋がありますけれども、それもやはり限られ

ているところがあって、実際的な経済効果はひたちなかのほうがだんだん増えている部分があります。将来的にどういうふうに自分たちの住む街を作っていきたいのかな、というのを、本当に真剣に考えて、

—— 町の人を考えをどうやって吸い上げるか、ですよね。アンケート調査をやるだけでは本当のことは分からない。どんな方法で、町の人を考えていることを知るか。

清宮：そうですね。

木村：はい、それでは、前半の共有はここまでにさせていただきたいと思います。

### グループトーク Bグループ (1/2) 「大間視察の様子を聞いて、何を感じたか」

